

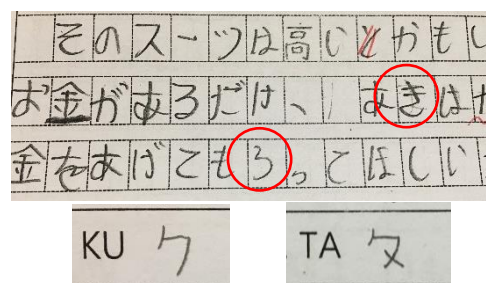
体育教員が日本について英語で教えてみたら。 Vol.3

オーストラリアの学校では外国語教育が小学校から始まります。歴史的に繋がりのあるヨーロッパの三言語（フランス語、ドイツ語、イタリア語）と経済的・文化的に関係の深いアジア三言語（インドネシア語、中国語、日本語）が外国語として扱われますが、どの言語を学習するかは学校裁量になっています。日本語を教える学校数は昨今の経済的情勢から減ってきているのが現状です。

さて、日本語の授業では小学校のうちはオーラルが中心です。小学校高学年や中学校に入ってからひらがなやカタカナの書き取りが本格的に始まります。そこで必ずコンピューターフォントの問題に直面します。取り扱う教材によって文字のフォントが異なるので、生徒にとってはそれが大きな障害になります。とりわけ文字の書き取り練習をしている時に、どの教材（どのフォント）を使ったかが、その後に大きな影響を与えます。

例えば、右のような「き」や「ら」の問題です。「き」を「き」（明朝体・ゴシック体）として学習してしまうわけです。これは私たちでもよく見かけます。ところが「ら」を「ら」（行書体）として習ったら、実にわかりにくくなります。

また、右はカタカナの「ク」です。「ク」に見えますか？隣はカタカナの「タ」です。「タ」に見えますか？どちらもカタカナも一画目の上が少し飛び出しています。また「タ」は三画目が少し突き出しています。ゴシック体の「タ」は確かに三画目が突き出ているのです。こういった間違いはまじめな生徒ほどよく起こります。これによって、「ケ」「ク」や「タ」「又」がほとんど同じに見えてしまうそうです。高校3年生になって「シ」「ツ」の違いを説明してもなかなか修正するのが大変です。



「お」 「も」 「り」 「ネ」 「ム」

これらのフォントで書かれた字をオーストラリアの生徒がどのように書いてしまうか想像できますか？フォントが与える影響は実に大きいです。

ちなみに授業で聞いたところ、最も難しいひらがなは「ふ」でした。確かに書き方・バランス、難しいですね。私も苦手な文字の一つでした。日本には習字があって、お手本を正確に丁寧に書く文化があります。改めて素晴らしい文化だと思いました。

さて、右の写真は長男の小学校の宿題です。「b」や「o」の書き方に衝撃を受けましたが、お手本がそうになっていました。西オーストラリア州ではこのように書きますが、ヴィクトリア州では私たちが書くような「b」「o」を使うそうです。州や人によって手書きの種類も様々あるようです。英語の多様性を感じさせられます。右の写真は授業で使うフラッシュカードです。

ところで、この「g」の形には未だ抵抗感があります。授業では使いませんが、生徒の中には使っている子もいます。フォントって大切ですね。

